北朝鮮人道支援の会 ニューズレター NO.49

（朝鮮民主主義人民共和国）

編集・発行人　吉田康彦

〒330-0855 さいたま市大宮区上小町１１４５　TEL:048-641-8203　FAX:048-647-6191

E-mail: yy2448@chive.ocn.ne.jp　URL:http://www3.ocn.ne.jp/~yy-dprk/

２００７年９月１日　郵便振替番号：00140-4-126579　加入者名「北朝鮮人道支援の会」

【現地報告】

水害直後の平壌を訪ねて

コリアこどもキャンペーン事務局長　筒井 由紀子

8月18日から25日まで朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）を訪れた。「南北コリアと日本のともだち展」実行委員会としての訪朝だったが、訪朝直前に大雨・洪水のニュースが伝わってきた。実行委員会は2001年から子どもの絵を通じた交流をソウル、平壌、そして日本各地で積み重ねてきたが、もともとは北朝鮮に人道支援しているNGOの集まりだ。日朝関係が「最悪の状態」にある中で、交流の意義を訴えながら、洪水被害に関する情報収集もするという二つの目的を背負う訪問となった。

＜平壌市内の普通江のほとりの爪あと＞（筆者撮影）

「日本」に対するきびしい視線

現在、北朝鮮国内の対日感情は厳しい。これまで「ともだち展」開催に快く協力してくれていた学校も今夏は開催を断ってきた。朝鮮総連関連施設への強制捜査で、機動隊と総連関係の若者がぶつかり合う様子が現地でも放映されたそうだ。保護者はもちろん、こどもたちもそれを見て、「心が進まなくなった」という。映像の力は大きい。日朝双方で相手を非難する映像が流れ、互いに憎悪と嫌悪の気持ちを募らせているいま、それを覆すのは容易ではない。実際の出会いや絵の交流を通して親愛の情を抱いたとしても、メディアの影響力に乗った世の流れに逆らいきれないのは、日本で同じ状況にいる私たちにもよくわかる。学校という立場を背負っていれば当然のことだろう。これまで政治とは切り離して子どもたちの出会いと交流を進めてきたが、やはり政治の影響を大きく受けざるを得ない状況になったことに無念さを感じる。

ひと筋の希望があるとしたら、現地の先生が、「完全にやめてしまうのではない、とにかく今の時期は避けたい」と言ってくれたことだ。絵画展はできなかったが、同行した朝鮮学校のこどもたちとの交流は歓迎してくれた。朝鮮学校の子どもたちの受け入れを担当した朝鮮の人は、絵画展のことを聞いて「重たいものもみんなで持てば持ち上がる。がんばりましょう」と励ましてくれた。日本人と話すのは初めてだという。

極度に悪化した国民感情を修復するのは並大抵なことではない。しかし小さなつながりを大切にしていくことが明日への希望を持ち続けることにもなる。憎悪と嫌悪の対立を選ぶのか、穏やかで平和な友好関係を選ぶのか、こどもたちの未来を考えれば、答えは明らかだ。

広範囲に及ぶ洪水の被害

行動範囲は平壌市内に限られたが、被災地が「全国規模」に広がっているのは理解できた。緊急救援の中心的役割を担っている朝鮮赤十字会、国際赤十字社連盟平壌代表部、世界食糧計画（WFP）のほか、江原道の被災地を訪問したばかりの朝鮮新報平壌支局など、現場を訪問した人から直接話を聞き、それぞれが調査したという地域を地図に記してみると、あまりに広範囲に被害が広がっていることに愕然とした。

帰国後の情報を総合すると、死者・行方不明600余名。流失・浸水家屋24万戸。被災者90万名以上となっている。多くは貯水池やダムの崩壊などで家ごと流されたり、土砂崩れ、川の氾濫などの犠牲者だ。朝鮮赤十字会では、国際赤十字社連盟と協力し、地域のボランティアを動員して被災者の救出と救援物資の配布に従事している。現在、多くの被災者が公共施設、親戚、近所の家などに身を寄せているほか、テントで避難生活を送っている。インフラが破壊され、清潔な飲料水の確保が難しい。暑さと湿気で衛生環境が悪化し、下痢や急性呼吸器疾患が2割ほど増えていて、子どもたちの健康状態が特に懸念されているようだ。

国連関係者は、「20数カ所の郡を回ったが、ひどいところと、それほどでないところがある」と率直な感想を語っていたが、被害の大小はあるにせよ、この国の食糧生産を支える穀倉地帯が被災したことは事実で、今年の穀物は100万トンの減収が見込まれると予測されている。

私たちが目の当たりにした被害

首都ピョンヤン市内も、今回の大雨で建物、家屋の浸水以外に、停電、電話の不通など社会インフラが被害を受けている。すでに市内の水は引いていたが、道路は舗装がでこぼこに浮き上がり、泥が堆積し、樹木が立ち枯れている。市民あげての復旧活動が市内のあちこちで行われていた。

週末を利用して板門店も訪れた。平壌―開城の幹線道路でも崖崩れが数カ所で起こり、軍が数百人規模で大掛かりな修復作業をしていた。片側通行の部分がかなり多く、車線を頻繁に変えて走行した。元山市から来たという人にも会ったが、平壌―元山の幹線道路は復旧作業が進んで通行可能になったそうだ。平壌近郊の農場に至る道路も、私たちが訪問した前日まで遮断されていたそうだ。主要な道路では数十名の人たちがぬかるんだ道路を土で固める作業をしていた。私たちの車もぬかるみにはまり込み、危うく立ち往生する場面も数度あった。

今回、最大の被害を出した江原道イチョン郡では、70年前、日本が植民地支配をしていた頃に作られた大きな貯水池が決壊し、民家50軒が一瞬にして流されたという。北朝鮮では、95、96年にも大水害が起き、公式発表だけでも死者200人、被災者800万人以上を出した。この時は日本政府をはじめ日本各地からも多くの市民が支援に参加した。

またも訪れた大災害に苦しむ人たちのために、今度はどのような対応をするのだろうか。国連をはじめ国際社会は次々と人道支援の提供を申し出ている。「人道支援」とは、何の条件もつけず、困っている人たちに手を差し延べることだ。この「人道支援」に取り組むことこそが、凍りついた両国間の心を今後つないでいく一助になると信じたい。